

【著者に聞く】

## 「『奇跡の自然』の守りかた～三浦半島・小網代の谷から」

三浦半島の先端に広がる「小網代(こあじろ)の森」。ここは、森から湿地、干潟、海まで一つの流域が自然状態のまま残されている、首都圏では唯一の場所だ。1980年代にはゴルフ場などの大規模開発が計画されたが、1995年に自然環境の保全が決まり、現在は、2000以上の希少な生物や自然を観察できる場所として整備が進んでいる。

この「小網代の森」を残すための環境保全運動は、実にユニークだ。開発に真っ向から反対するのではなく、町と自然が共生するための都市開発の代替案を提示し、結果として、「小網代の森」を保全する方向に導いた。その、30年以上にわたる活動を記したのが、「『奇跡の自然』の守りかた～三浦半島・小網代の谷から」である。著者の一人である、NPO法人小網代野外活動調整会議代表理事の岸由二氏に聞いた。

(聞き手／高田功、大曾根薫)

——本書を執筆した経緯をお聞かせください。

**岸由二・NPO 法人小網代野外活動調整会議代表理事** 小網代の森の保全運動は、とても長い歴史があって、始まったのは1983年です。当時、慶応義塾大学の同僚で、物理学を担当する教員だった藤田祐幸さんから、「転居先の三浦市に、すばらしい森がある。開発されるかもしれないので、なんとかかして守りたい。一度現地を見て、保全に協力してほしい」との話があったんです。

藤田さんは、当時、「ポラーノ村を考える会」という環境問題を考える市民団体の代表をしていました。「ポラーノ」とは、作家・宮澤賢治の童話に出てくる、広場の名前です。人と自然の共生に深い関心を寄せていた賢治は、理想の共同体をテーマにした童話を書いた。それが会の名前の由来となっています。藤田さんは、当初、ここを原生林だと思ったようですが、1960年代まで、田があり、民家があったところ  
です。開発にむけて農作業が終焉して、浦の川の流域全体が自然のまま残されたのです。

私は、それ以前に、横浜市の六大事業に関連した、自然保護運動に関わっていたのですが、政治団体などにもみくちやにされ、しばらく市民運動から遠ざかりたいと思っていました。また、当時は、河川の流域という枠組みで自然保護や資源管理、都市の再生を考える「流域思考」を、神奈川県鶴見川でやっぺいこうと考えていたところだったのです。



『「奇跡の自然」の守りかた』  
岸由二、柳瀬博一著 筑摩書房(ちくまブリーマー新書) 定価 880 円＋税

ですが、藤田さんから「とにかく現地を見てくれ」と言われ、84年の秋に見に行ったんですよ。

しかし、その森を見たとき、たん、「ちょっと待て、こんなすばらしい環境が残っているんだ」と。「これは生涯をかけて関わっていかなくてはならない、ここでパスしちゃったら後悔するな」と思い、鶴見川流域の活動をしながら、藤田さんと一緒に小網代の森を保全する運動に関わることになったのです。

そこから今日まで、保全運動は30年以上にわたるのですが、組織も変遷してきました。小網代の活動は、1983年に「ポラーノ村を考える会」でスタートし、藤田祐幸と岸由二が基本のビジョンをまとめて、そのビジョンのとおりをやってきたんですけど。そうじゃない、別の団体が始めたんだ、と言い出す人がいて……。『出雲風土記』と『日本書紀』みたいなものですね(笑)。

それぞれが語る歴史が異なってしまうのはまずい。ここで正しい小網代の自然保護運動の歴史を書き記しておこう、ということで、本書を執筆することになったのです。たまたま、左足の股関節の手術で、2週間ほど入院することになり、共著者の柳瀬博一と編集の鶴見智佳子さんがやってきて、「これは、ちょうどいい機会だ」と。「とにかく原稿書きなさい」と(笑)。そこで書き下ろしました。



**NPO 法人小網代野外活動調整会議代表理事  
岸由二(きし・ゆうじ)氏**

1947年東京都生まれ。横浜市立大学文理学部生物科卒業。東京都立大学理学部博士課程修了。専門は進化生態学。慶應義塾大学名誉教授。流域アプローチによる都市再生論を研究・実践。NPO 法人小網代野外活動調整会議代表理事。著書に、本書の他、『自然へのまなざし』、『流域地図の作り方』など。訳書にウィルソン『人間の本性について』、共訳にドーキンス『利己的な遺伝子』など。

——書名では、小網代の森を「奇跡の自然」と称しています。どんなところが「奇跡の自然」と呼ぶにふさわしい場所なのでしょう。

**岸代表理事** 三浦半島にある小網代の森は、浦の川の源流から河口までが、面積約70haの流域まるごと、ひとまとまりの緑に覆われています。途中が、道路や家屋、施設などで分断されていません。この規模で、源流から河口までが手付かずに残っている場所は、首都圏では唯一、小網代の森だけなのです。全国でも数箇所。宅地開発が進む首都圏で、まるごと残っているのは、奇跡というほかありません。

また、ここには、保全運動の象徴になったアカテガニをはじめ、約2000種の希少生物が生息しています。森に棲むアカテガニは、夏の大潮の晩に、お腹に抱えた子(幼生)を海に放ちます。これは森から海までが、分断されていない環境だからできることなのです。

——本書は、おもに小網代の森を守るための保全運動と、環境保全の考え方について述べられてい

**まず。環境保全運動については、展開が独特ですね。**

**岸代表理事** ゴルフ場や宅地造成などの具体的な開発計画は 85 年頃に出てきました。それに対して、「ポラーノ村を考える会」が推進している環境保全運動のビジョンを書こうということになり、藤田さんと私がまとめました。基本的には、「町と自然の共生」を謳っており、開発反対、じゃないんですよ。代替案の提示なんですわね。

いろいろな経緯があって、私も藤田さんも、都市計画の知識がありました。170ha くらいの大規模開発なので、ゾーンを分けて土地の利用区分をし、都市の基本構想を自分たちで書いてしまおう、と。中途半端にここだけ守れとか、この動物や植物が大事だ、ではなく、「開発には賛成です。ただし、計画の中身を一部変えましょう」という提案をしたのです。

というのは、開発計画自体は、鉄道の延伸、道路の拡張、住宅建設、農地造成、ゴルフ場建設という 5 点セットだったのですが、そのうち、ゴルフ場以外は、三浦市の都市インフラとして必要なものだったんですね。ゴルフ場は、開発のための資金源でした。当時はバブル経済の前ですから、ゴルフ会員権は高額ですよ。6000 万円の会員権を売り、1 万人の会員を募れば、6000 億円でしょ。それを開発費用に充てようとしていたんです。ですが、私たちはバブルが飛ぶと思っていたので、ゴルフ場だけはやめて、エコリゾートとして使えるように保全しましょう、という提案をしたのです。

87 年の時点で、「ポラーノ村を考える会」の提案を冊子にしたものがこれですが、当時から湿原の中に木道を通すイラストを入れています。今、小網代の森に行くと、まさにこのとおりになっています。



当初から構想があった、湿原の中の木道

——最初から開発賛成と？

**岸代表理事** 小網代の保全を考えるにあたり、生態系重視でいくか、希少生物重視でいくか、検討をしました。当時、開発反対型の運動のほとんどは、希少生物がいるからこの地域を保全をしようという方向でした。私は、流域生態系の単位で自然や都市を考えることに強い関心を持っており、希少生物重視の運動では、都市計画との調整がつかず、環境保全の未来はないと思ってきました。

ですので、希少生物を調査するメンバーとは連携しながらも、生態系重視で、開発の代案や保全のビジョンをまとめようとして……。そして、都市の計画との調整を図り、保全を現実のものにするために、「開発賛成」というスタンスでスタートすることを考えたのです。

——そのスタンスが功を奏したのですね。

**岸代表理事** 「反対」というと、開発を推進する側は、どうしても頑なになる。しかし、「開発は賛成です。でも3分の1は自然を残しませんか」と提案すると、相手は聞く耳を持つ。心を開く。「ちょっと聞いてみようかな」と思うのではないのでしょうか。

そもそも都市は、みんな法律で縛られていて、環境を保全したいと言っても、みんな誰かの土地なんです。その土地に、子孫の繁栄を賭けているんですね。環境保全のためだからと、行政などに取り上げられてしまっただけは、たまったものではないのですが、なかなかそのところがわからず、大声で反対を唱える人が多い。

それに、自然保護の運動を始めると、さまざまな人の思惑が入り混じってしまいます。政治団体の思惑や利権などが絡み合い、反対のための反対を唱え、あるいは政治家が選挙に利用する。あげく、当初の自然保護の目的はどこかに行ってしまう……というのが、運動の現実です。

——それから30年以上の環境保全運動を進めてきました。

**岸代表理事** 30年で、大きな結果が出ましたね。83年に「ポラーノ村を考える会」で、小網代の環境保全の運動がスタートしました。93年には、三浦市から、ゴルフ場の開発はないと内々に伝わってきていました。95年には県知事の長洲一二さんが保全方針を固めてくださったので、これでうまくいくという確信が生まれました。2004年には国の制度として、緩やかな保全が決まりました。2015年には小網代の森を整備してオープンしました。

こう見てくると、10年が一つの区切りとなっているのでしょうか。

——その間に組織も変遷していますね。

**岸代表理事** この運動は、「ポラーノ村を考える会」からスタートしましたが、ゴルフ場反対の署名運動を進める中、メンバーから、三浦市長選に立候補したいという人が現れ、政治的な混乱が起こってきました。私は、政治運動と絡めるのは当初から反対でした。「開発反対」を掲げて選挙に出た人が負ければ、地元住民は開発が好きなんだ、ということになる。そうすると、開発推進派は無理にでも開発を進めざるを得なくなります。



小網代の森を保全するために執筆された、『この美しい自然を次の世代に伝えるために 小網代の森の未来への提案』(1987年9月 ポラーノ村を考える会)など

そこで、政治を目指す人とは距離を置き、地元の市民と連携する「小網代の森を守る会」を、1990年に設立したのです。保護団体は、地元と根差していないと、所詮、余所者と言われてしまうということもありますから。

その後、この団体を基本に、小網代を保全する運動をしてきましたが、実は、神奈川県によって保全が表明された1995年から混乱の時代に入ってしまったのです。

というのも、保全は表明されたものの、県のどの部局が、どのような制度を利用して担当するのが明確にならなかったからです。たとえば、都市公園決定をして公園になると、年間数千万円の指定管理費が出るんです。それが利権になり、どのセクションが管轄するかという争いにもなります。政治家や法人も動き出し、いろいろな団体に関わるようになりました。

そこで、1998年から、任意団体として小網代野外活動調整会議が編成されました。小網代に関わる重要な団体はすべてここに入り、それぞれが勝手な動きをしないように調整していく組織です。これによって、保全運動にかなり落ち着きが出たといえます。この会議は、2005年、NPO法人として自立し、現在も小網代を保全するために活動していますが、このような形にできたのは、元・神奈川県自然保護課の課長さんで、その後、かながわトラストみどり財団の事務局長となった本間正幸氏のおかげです。

### ——小網代の森の保全に大きな役割を果たした方ですね。

**岸代表理事** 小網代保全の大きなターニングポイントとなった出来事の一つに、1990年、磯子のプリンスホテルで開催された国際生態学会議があったのですが、このときに、「岸先生の考えていることがわかった。小網代のことは命を懸けて進めるから、協力してくれ」と言ってくれたのが、本間氏です。NPO法人小網代野外活動調整会議をはじめ、政治家などに利用されないような仕組みを作ってくれました。

実は、財団の事務局長になったとき、すでにご病気を患っていたようです。「命を懸けて……」というのはそういうことだったか、と後にわかりましたが、お葬式のときに、奥様にお会いしたら、「うちの主人は、宮澤賢治の大ファンでした。ポラーノ村の理想に、共鳴したのだと思います」と言ってもらえました。

行政職員の中には、すごい人がいます。そういう人が力を発揮すると大きな結果が出ます。保全が確定する前に、お亡くなりになって、本当に残念です。

### ——本書の中のもう一つのテーマ、環境保全の考え方についてはどうでしょうか？

**岸代表理事** 自然保護というと、「手つかずの過去の自然を回復する」と思う人が多いでしょう。でも「手つかずの自然」なんて、地球上のどこにもなくて、みんな手がついちやってるんです。

小網代の森も、もとは田んぼです。田んぼじゃない頃は、縄文人がいて、山を焼いていて土砂がバンバン崩れていた。その前は、大氷河期ですから、海面がもっと低いんですね。その頃には、トンボやホタルもいないし、アユも上がってこない。真っ暗な森ですね。じゃあ、今、小網代をその真っ暗な森に戻すんですか、と。そういうことを考えずに、「手つかずの過去の自然を回復する」と唱えている人は、案外、多いんです。

どこに戻すのか。100年前？ 1000年前？ 1万年前？ みんなが合意する「手つかず」は存在しない。だったら、今の人たちが決断して、どんな自然にするか、未来の課題として決めるしかない。「過去に戻す」のではなく、「創造する」ということですね。

小網代流域の現在のポテンシャルを利用して、小網代の生態系を保全するのであれば、水田耕作型の水循環を再生し、それを基盤に未来志向で多自然流域世界を創出するのが良いと、私は考えました。小網代の谷底部は棚田だったので、その水循環に戻し、しかしそこには稲は植え、農業と共存してきた野生生物たちに解放してやろう、というのが私たちの考え方です。

この本に書かれていることは、運動の仕方や、生態系の保全の方式、多自然流域創出の方法など、皆さん、あまり聞いたことがないかもしれない。でもこれがむしろ国際標準なんですね。あと5年もすると、妥当な選択と、広く支持されるようになると思っています。

### ——小網代の森はもっと多くの人に知ってほしいですね。

**岸代表理事** そうですね、もっとメディアで取り上げてほしいのですが。新聞やテレビでは、ほとんど報道されていません。こんなにすごいことをやっているのに。

企業と連携する団体の活動を、自然保全運動として記事にする方針はないと言っている新聞社の人もいるようですね。考え方の違いから、鶴見川や小網代の森の活動を報道機関に妨害されたこともありました。どうも、私はいろいろと誤解もされているようすし。

そうした中でも、しっかり連携・協働してくれた市民や企業があるから、今の小網代の森があるんです。ありがたいことだと思います。

### ——他の環境保全運動にも応用できるでしょうか？

**岸代表理事** 北海道や大阪などから、河川流域の再生について、鶴見川や小網代の森の視察に来て下さる人たちがいます。また、横浜市や JICA と一緒に、フィリピンで河川流域の防災などの支援もしています。小網代の森の活動が、必ずしも他でそのまま応用できるかどうかはわかりませんが、参考にはなるでしょうね。

### ——これからの小網代の森は？

**岸代表理事** あと20年ぐらいで、形にはなるとなっています。

森の整備に関して、NPO 法人小網代野外活動調整会議は、県から管理費は受けていません。管理費というのであれば、たとえば小網代を都市公園決定するという方法もあるんですね。しかし都市公園の管理方式と、「奇跡の自然」である小網代流域の生物多様性創造は整合しにくいのです。そこで私たちは、神奈川県、三浦市、かながわトラストみどり財団、調整会議の4

者で、役割分担を定める覚書を結んでいます。その覚書のおかげで調整会議は、独自の努力で寄付を受け、有料の流域ガイドを受託し、自然の冊子なども販売することができます。かながわトラストみどり財団からはまとまった交付金を受けます。代わりに私たちはトラスト会員の拡大を応援する方式になっているのです。

NPO として私たちは、小網代の仕事を進めるスタッフに、1 日 6000 円の日当を支払っています。昨年は仕事が多く、450 万円ほどの赤字になりました。専従の人も雇いたいと思うのですが、現状では厳しい。中小企業の社長のように、いつも資金繰りを考えていますね(笑)。

小網代は今、ようやく中央の谷の低地部分の 5ha ほどの領域の全面湿地化と、基本水系の整備が一段落するところ。大小の枝沢（小流域）の整備はまだ入り口だけで、本格整備はこれから。干潟保全の確定も視野に入れると、10 年、20 年はかかるでしょうね。

資金など悩みはつきませんが、道筋は見えています。皆さん、これからも小網代の森をウォッチしてください、そして、ぜひ現地に来て、応援してください。